

# アルジェリアの歴史表象

## —アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリーを巡って—

平成 20 年度入学

派遣先国：フランス、イギリス、アルジェリア

栃堀木綿子

キーワード：歴史、表象、顕彰、アルジェリア

### 対象とする問題の概要

本研究は 19 世紀の人物であり現代アルジェリア国家の父と称される、アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリー (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, 1807/8-83、以下アブドゥルカーディル) についての言説を対象とした。彼は 1832 年フランス軍の侵略に対するジハードを遂行したことから、アルジェリア・ナショナリズムにおいて 1954-62 年の独立戦争に代表される植民地抵抗運動、独立後国家の象徴と位置づけられてきた。他方、現代のフランスにおいて、彼について主に精神的側面から言及する動きがある。アブドゥルカーディルは現在、両国の歴史観を投影した形で再考されているといえよう。

### 研究目的

調査の目的は、アブドゥルカーディルに関する言説の表象の変容過程を以下の 3 点—(i) フランスにおける表象、(ii) アルジェリア・ナショナリズムの立場からの表象、(iii) 現代におけるアルジェリアとフランス両者の結節点—において明らかにすることであった。

### 方法

本研究の方法は文献調査とフィールド調査であった。文献調査ではフランスとイギリスの図書館と文書館において、アブドゥルカーディルに関連した文書資料とマイクロフィルムを渉猟した。フランスでは国会図書館およびエクサンプロヴァンス大学アラブ・ムスリム世界調査研究機関、海外中央文書館でアルジェリア関係の行政資料、新聞資料を調査し、同時に抗仏武装闘争の降伏後に彼が拘留されていた各所を訪れた (図 1、文末付録)。(1/9-11, 1/19-30)。イギリスでは、マンチェスター大学で開催された大学院生による英国中東学会大学院生会議に出席するとともに (1/13-14)、国立文書館での資料収集を行った (1/15-18)。アルジェリアでは、関係者への聞き取り、アブドゥルカーディルの今日での表象のされ方についてのフィールド調査を行った (図 2, 1/31-2/8)。近隣のチュニジア、エジプトを中心として 1 月半ばから深刻化した反体制暴動の影響が懸念されたため、東部への移動は控えた。

## 結果

### (1)文献調査

フランス海外文書館の資料からはアブドゥルカーディルによる手紙として、反仏闘争時の際のフランス軍との交渉 (18MIOM36-37)、降伏後のフランス国王、臨時政府に宛てて書かれたものがみられた (18MIOM57)。イギリスの文書館の資料からは、アルジェリア・ナショナリズム運動での主導的役割を果たした彼の子孫に対する欧州の関心が明らかとなった (FO141-819-13)。これらの資料は当時の英仏において彼がどのように認識されていたのかを、双方の植民地政策、当時の国際情勢と関連付けて分析する上で有効である。

### (2)今日の表象のされ方

#### フランスにおいて

1848年から58年、アブドゥルカーディルが一行とともに拘留されていた場所を訪れた。まずトゥーロン要塞は軍事基地であるため立ち入りはできなかった。次にその4ヵ月後、彼が移送されたポー城では現在、彼について言及する事物はほぼ皆無であり、同城で誕生し、1598年ナントの勅令に調印した国王アンリ4世を大々的に押し出す要素が強かった。1848年11月から1852年解放されるまで彼が過ごしたアンボワーズ城では、城内の庭に拘留中病没した一行25名の墓碑が建てられ (2005年6月23日建立、写真1)、日本語のパンフレットにもアブドゥルカーディルについてのコラムがあった。しかし城内では彼の肖像が王族の大画面の肖像を背景に提示されていた (写真2)<sup>1</sup>。フランスによる彼の像は、フランス史との関連では言及しないか、旧植民地支配の価値観を反映せざるを得ないといえる。

#### アルジェリアにおいて

アブドゥルカーディルが指導者となることを宣言したムアスカル近郊では、彼の祖父と父の墓廟、陣営跡、城壁等の史跡を目にした (写真3)<sup>2</sup>。軍事上重要な都市であったミリアナを訪れ、居城、武器製造工場を見学した (写真4, 5)<sup>3</sup>。アルジェの国立調査センターにおいては彼についての資料が数多く編集・翻訳、出版されており、国史の中心人物への大きな関心がうかがえた。2011年イスラーム文化首都に指定されたトレムセンでは、アブドゥルカーディルについての国際会議も来年1月に開催される。彼をアラブ・イスラーム文化遺産の大きな潮流の中にどのように位置づけるのかにおいて、新たな展開が垣間見えるであろう<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> ポー、アンボワーズ城はルネサンス期に建設され、19世紀のナショナリズム形成期である王政復古、第二帝政の時代にプロパガンダ目的から大々的に改修が行われた。

<sup>2</sup> 1837年彼が現代アルジェリア国家の基礎の“首都”としたターグディムトには、今回行っていないが、その近郊ティアレでは独立戦争の元戦士 (ムジャーヒダ) の女性、マルヤム・ムフタリー氏の戦争中の体験を聞き、戦没者の遺品を集めた個人博物館を見せていただいた。

<sup>3</sup> ミリアナはフランスの制圧後は、独立戦争の拠点として多くの戦士 (ムジャーヒドゥーン) を輩出した。

<sup>4</sup> トレムセン大学ブージュッラ教授、アルジェ大学トレムサーニー教授をはじめ、アルジェリアでは大変多くの方々にお世話になった。ここに感謝の意を表す。

## 反省・今後の展望

今回、両国の歴史観が反映されたアブドゥルカーディル像の現状を確認することができた。しかし現在の結節点としての彼の像を明らかにするまでには至らなかった。今後は二項対立に限定されない主体を設定して検討していき、未公開資料の多い海外文書館、歴史文書館で時間を十分にとって資料収集を行いたい。

## 付録

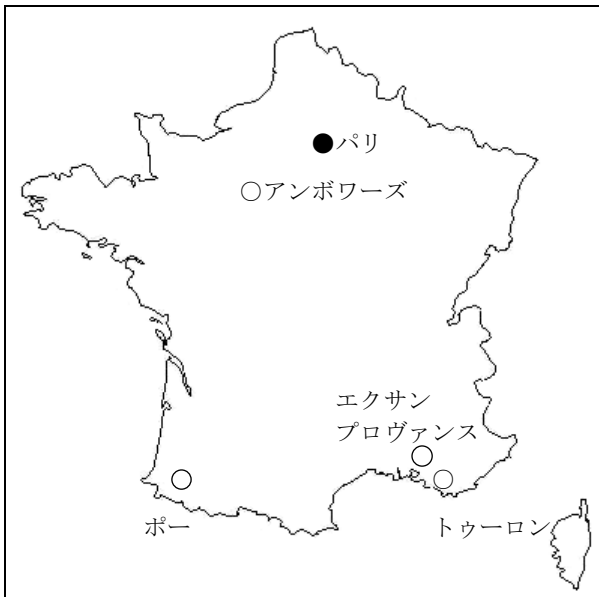


図1：フランスでの調査地



(写真1) フランスで没した一行の墓 (アンボワーズ)



(写真2) アブドゥルカーディルの肖像 (同)

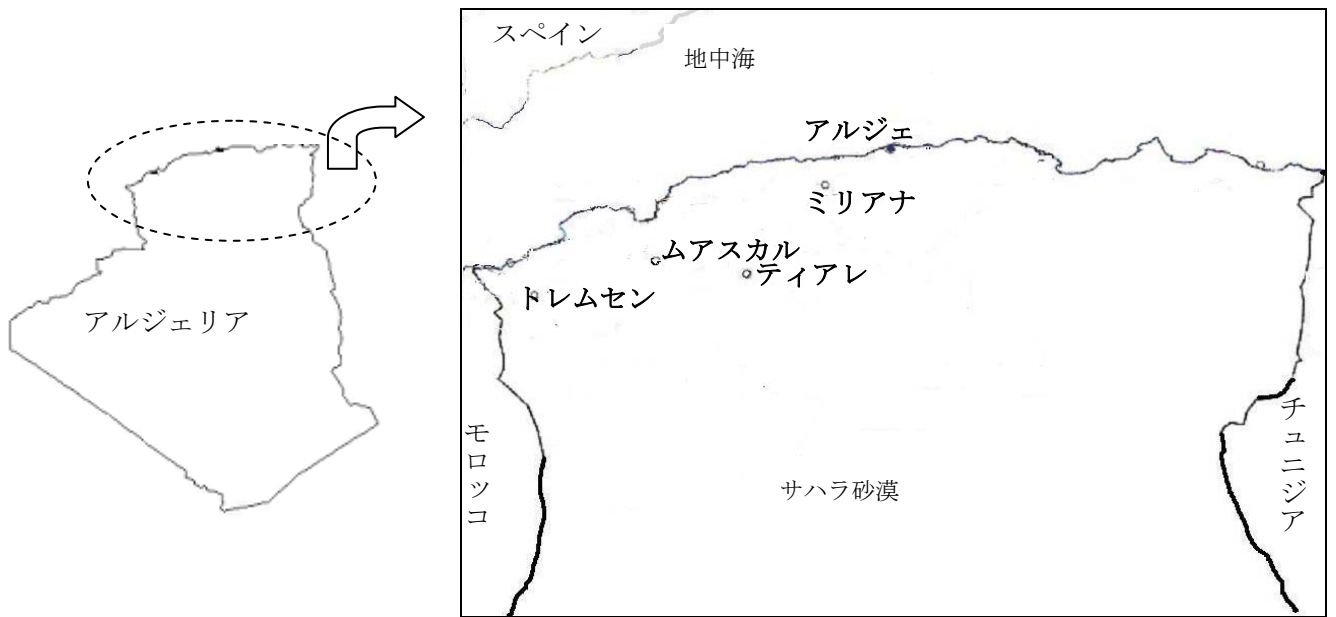


図 2 : アルジェリアでの調査地



← (写真 3) 戦闘を宣言する  
アブドゥルカーディル  
(ムアスカル)



←(写真 4)  
博物館の展示: 正規軍の装  
備(ミリアナ)

(写真 5) →  
ミリアナの工場: 山からの  
水力が動力源であった  
(同)

